

教育学部入学生の教職キャリアに対する意識の違いについて

～教職スタート科目「教職概論」の授業改善に向けて～

霜川 正幸・村上 清文・岸本憲一良・佐々木 司・鷹岡 亮
高橋 雅子・中村 哲夫・西岡 尚・長谷川 裕

Differences in Attitudes towards the Teaching Profession among Freshmen in the Faculty of Education
– For the improvement of freshmen seminar lesson plans ; Introduction to the Teaching Profession –

SHIMOKAWA Masayuki, MURAKAMI Kiyofumi, KISHIMOTO Kenichiro, SASAKI Tsukasa,
TAKAOKA Ryo, TAKAHASHI Masako, NAKAMURA Tetsuo,
NISHIOKA Takashi, HASEGAWA Yutaka

(Received January 11, 2011)

キーワード：決定時期、動機、適性、情報収集、授業改善

はじめに

本学部は、学校教員や社会のあらゆるステージで教育的素養を持ち貢献できる人材等の養成を目標とし、教育研究内容、卒業要件や教員免許状取得条件等の異なる5課程22コース、選修を展開している。その中で、各学年約250人の学生たちが、日々教育研究や教職等キャリア形成の充実深化に努めている。

筆者らは、本学部における教職スタート科目「教職概論」を担当している。「教職概論」は入学直後の第1 Semester（1年前期）に開講され、教員免許状の取得や卒業要件の達成に向け、毎年90%近い学生が受講する「教職に関する科目」である。運営にあたっては、教室収容人数等の関係から、平成21年度に新設された「小学校教育コース」を除く「学校教育教員養成課程（教科教育コース、国際理解教育コース、幼児教育コース、障害児教育コース）」グループと、「実践臨床教育課程（人間教育学コース、教育心理学コース）・健康科学教育課程（スポーツ健康科学コース、生活健康科学コース）・情報科学教育課程（表現情報処理コース、数理情報コース）・総合文化教育課程（国際文化コース、文芸・芸能コース）」に「小学校教育コース」を加えたグループに分けて開講している。

その中で、筆者らは、授業や学生との関わりの中で、両グループの集団としての雰囲気（関心意欲、目的意識、授業規律等）の「違い」、教職キャリア形成に向けたモチベーション（動機、目標、課題意識、気構え等）の「幅」、入学段階で有する情報（質的量的な豊富さ、正確さ等）に「差」があると感じ、それらが年々激しくなるように感じてきた。

筆者らは、科目運営にあたり、科目開設のねらい、指導内容の精選と構造化や授業の計画的・系統的实施を図るとともに、学び成長する主体である学生の状況やニーズに応じた

指導の工夫改善の継続に努めたいと考えている。

そこで、入学直後の学生の「違い」、「幅」、「差」の理解を目的とし、「教職概論」冒頭に実施してきた4年間の「アンケート」結果を報告し、今後の課題等について整理する。

1. 調査の対象、目的や方法等

1 「教職概論アンケート」

時期：平成19年度～22年度「教職概論」第1時間目（木曜2・3限）

対象：平成19年度～22年度「教職概論」第1時間目受講者

方法：調査紙による

回答：回収数を合計、集計・整理区分により示す（表1）

表1 「教職概論アンケート」回収数

年度\区分	合計	1群	2群	3群	4群
平成19年度	236	85	35	116	
平成20年度	212	79	34	99	
平成21年度	229	79	34	85	31
平成22年度	252	84	32	104	32

項目：「所属」、「性別」、「学年」以外の項目（本稿関係分）を示す（表2）

表2 「教職概論アンケート」調査項目

1 本学部の志望・受験を決定した時期 ①高校1年 ②高校2年 ③高校3年(予備校)の1学期～夏休み ④高校3年(予備校)の2学期～冬休み ⑤センター試験の後
2 本学部の志望理由、動機（複数回答可） ①教育学部進学が第1希望だった ②他に受験する大学・学部が無かった ③家族や親類の勧め ④先輩、友人が在学していた ⑤先生（高校・予備校）の勧め ⑥教育問題に関心を持っていた ⑦自宅に近い ⑧自宅から遠い大学に行きたかった ⑨学校教員になりたかった ⑩センター試験の結果から ⑪偏差値にあった大学・学部だった ⑫特に理由はない ⑬その他 ⑭選修、コース等のカリキュラムや内容から （※⑭は平成21年度に付加した項目）
3 学校教員希望の有無 ①強く希望 ②希望 ③未定 ④希望しない ⑤全く希望しない
4 学校教員の適性への自己評価 ①大いにそう思う ②大体そう思う ③分からない ④あまり思わない ⑤全く思わない
5 本学部の受験情報の入手先（2つまで） ①受験雑誌 ②先輩や友人 ③高校（予備校）の先生 ④公開説明会 やオープンキャンパス ⑤本学、本学部のホームページ ⑥家族や親類 の人 ⑦高校（予備校）の進路資料室資料 ⑧赤本 ⑨その他

集計：卒業要件、教員免許状取得や調査途中の新設等条件により区分した（表3）

表3 「教職概論アンケート」集計・整理区分

区分	課程（コース、選修）名（コース、選修名略）
1群	学校教育教員養成課程（教科教育・10選修）
2群	学校教育教員養成課程（国際理解教育、幼児教育、障害児教育）
3群	実践臨床教育課程（人間教育学、教育心理学）、健康科学教育課程（スポーツ健康科学、生活健康科学）、情報科学教育課程（表現情報処理、数理情報）、総合文化教育課程（国際文化、文芸・芸能）
4群	学校教育教員養成課程（小学校教育）

2. 結果と考察

2-1 「本学部の志望・受験を決定した時期」について

図1～4で「決定時期」の全体と各群別割合を見た。

各年度ともに「センター試験後」が圧倒的であるが、その割合は減少傾向にあり20年度以降は半数を下回る。「高校1・2年」、「3年2学期」の割合に大きな変化はない。逆に「3年1学期」が漸次増加する傾向にあり、高校2年から3年前期にかけて志望校を絞り込み、決定していく生徒が増えていると見られる。

要因としては、「AO入試」、「推薦入試」の拡大に応じた志望校決定の早期化、高校におけるキャリア教育、進路指導や受験対策の充実、多数の高校が大学教員等を招聘した「大学を学ぶ出前講座」「進路説明会」等を2年中旬から後半に実施していること等が考えられる。また、中学から高校に「推薦」で進学する生徒が半数近くになっている現状から、進学先を早めに決めようとする保護者の増加も考えられる。

各群別には、1群・3群では「センター試験後」が半数以上を占め、「高校2年」までに決めた生徒は2割に満たない。3年時の諸調査やセンター試験等の結果を見て判断している様子が分かる。逆に、2群の学生は比較的早い時期から志望先を決定している。4群は「AO入試」で定員の3分の2が合格する「小学校教育コース」のため決定時期が早いのは当然であるが、「高校2年」での決定者が増える傾向にある。

次に、図5～8で「決定時期」の各群別の経年変化を見た。

4群を除き「センター試験後」が高い割合で推移しているが、2群は年度による変化が激しく「高校3年」の早い時期か「センター入試後」が「一年おき」といった様相である。4群は「AO入試」の出願が8月であるため「3年1学期」がほとんどとなる。

なお、1～3群には複数の「コース・選修」が含まれることから、各「コース・選修」の傾向を把握することが今後必要と考える。

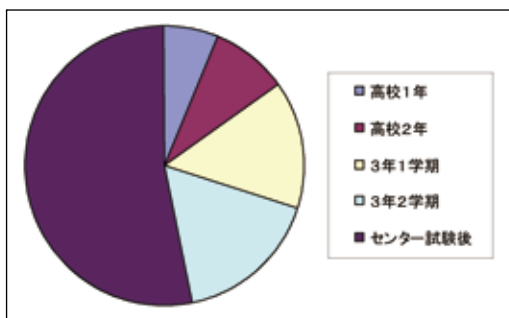


図1 平成19年度 全体と各群別の割合

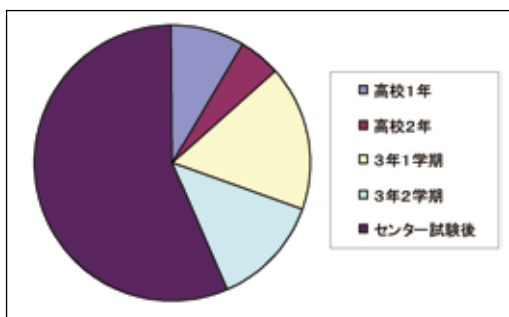
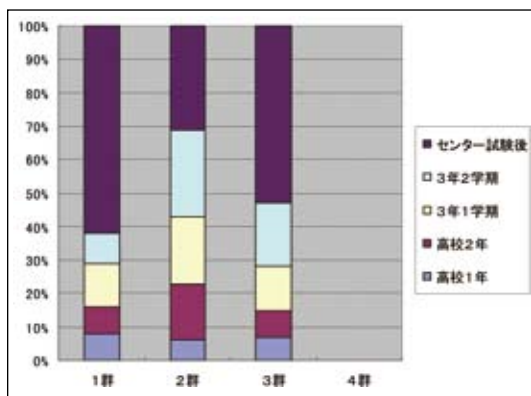


図2 平成20年度 全体と各群別の割合

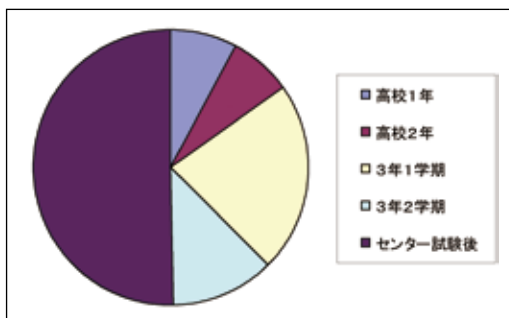
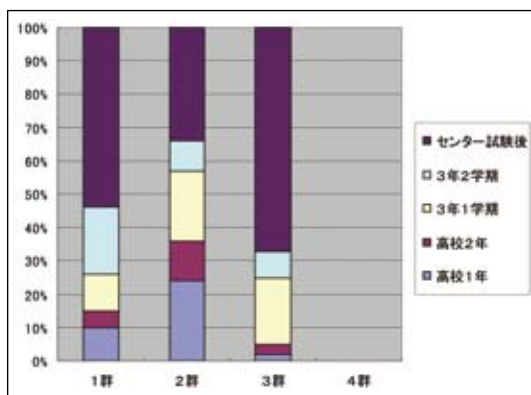


図3 平成21年度 全体と各群別の割合

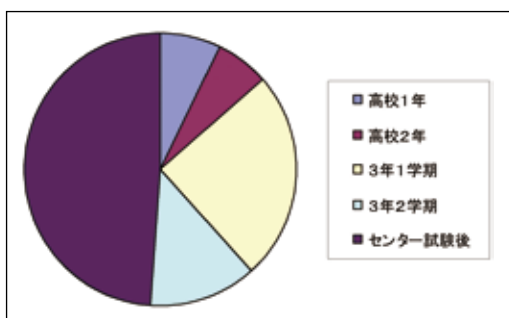
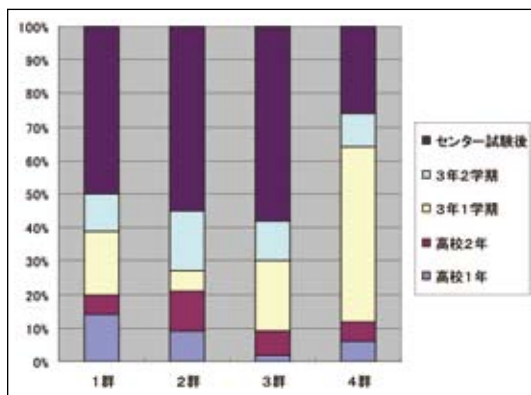
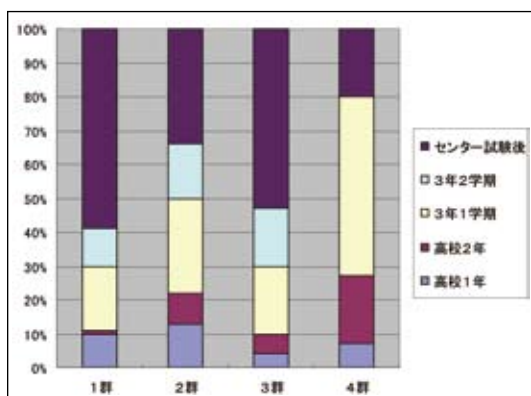


図4 平成22年度 全体と各群別の割合



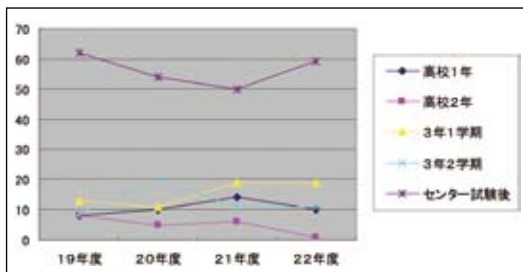


図5 1群の経年変化

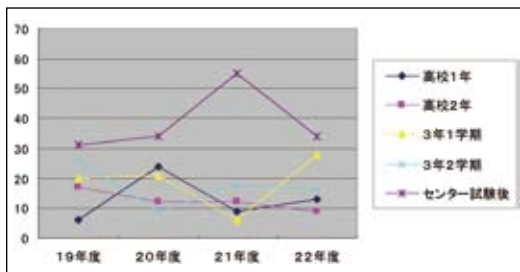


図6 2群の経年変化

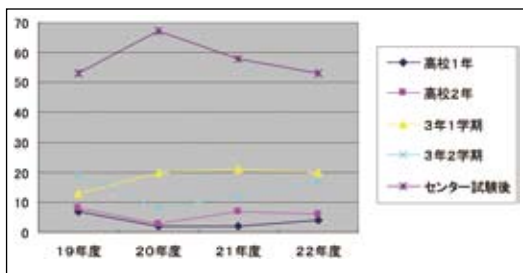


図7 3群の経年変化

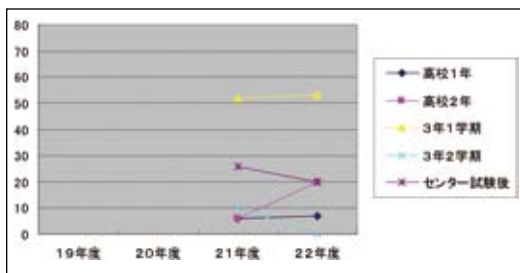


図8 4群の経年変化

2-2 「本学部の志望理由、動機」について

図9は「志望理由、動機」について各項目別に経年で見たものである。「⑭選修、コース等のカリキュラムや内容から」については、「小学校教育コース」新設による受講グループの再編成に合わせて付加しており21年度以降に現れる。

「①教育学部進学が第1希望だった」、「⑩センター試験の結果から」、「⑨学校教員になりたい」と「⑭カリキュラムや内容から」が高い割合を示しており、「⑪偏差値にあった大学・学部」、「⑤先生の勧め」、「⑦自宅に近い」と続いている。

しかし、図9や図10「各項目割合の年度別推移」を見ると、特に22年度に筆頭項目となった「⑩センター試験の結果から」や「⑤先生の勧め」、「⑦自宅に近い」、「⑪偏差値にあった大学・学部」が近年増加する傾向がある。逆に「①教育学部進学が第1希望だった」、「⑨学校教員になりたい」、「⑥（そのコース、選修の）教育問題に興味があった」が減少している。

教育や教職への興味関心、教職を中心とするキャリア形成に向けた意欲や態度等よりも、テスト結果、偏差値や周囲の進言等により希望するキャリアや志望校を決定、変更する生徒の現状を示している可能性がある。要因として昨今の経済状況、保護者の負担増や就学支援の弱体化等も挙げられるが、高校までのキャリア教育、進路指導やきめ細かい教育的支援のあり方が今後の課題となる。

各群別の上位項目は表4のとおりであった。1群は⑨①⑩が群を抜いて高く、⑭⑦⑪がそれらの半分程度の割合となった。2群は①⑭⑨が高かったが、⑤に続いて⑥を選択した者が多く各個の教育課題に対する興味関心が現れる形となった。3群は⑩に続いて⑭⑨①が拮抗し、コース、選修の個性や多様さを示した。4群は⑭が群を抜き①の倍以上の割合となった。コースやカリキュラムの様子が伝わる中で期待感が強く出た結果と考えられる。

表4 「本学部の志望理由、動機」各群別上位項目(22年度)

	第1位項目	第2位項目	第3位項目	第4位項目
1群	⑩学校教員希望	①教育学部希望	⑩センター試験	⑭カリキュラム
2群	①教育学部希望	⑭カリキュラム	⑨学校教員希望	⑤先生の勧め
3群	⑩センター試験	⑭カリキュラム	⑨学校教員希望	①教育学部希望
4群	⑭カリキュラム	①教育学部希望	⑨学校教員希望	⑩センター試験

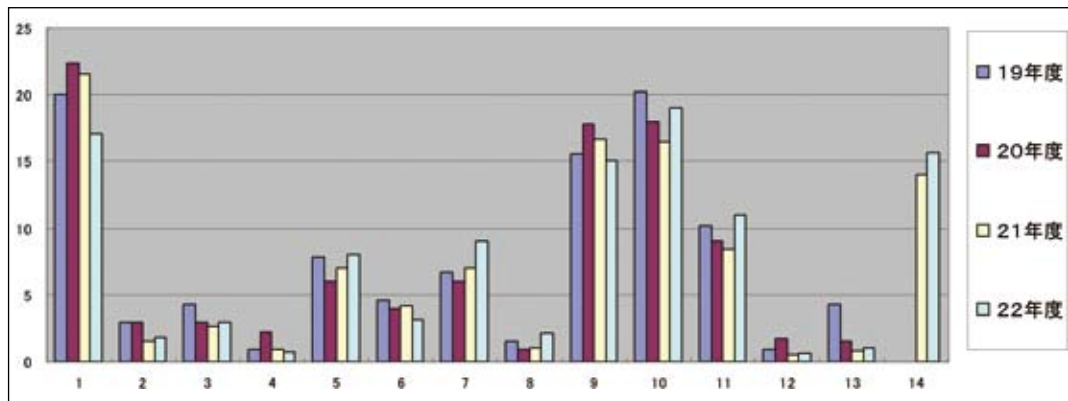


図9 各項目別の経年比較

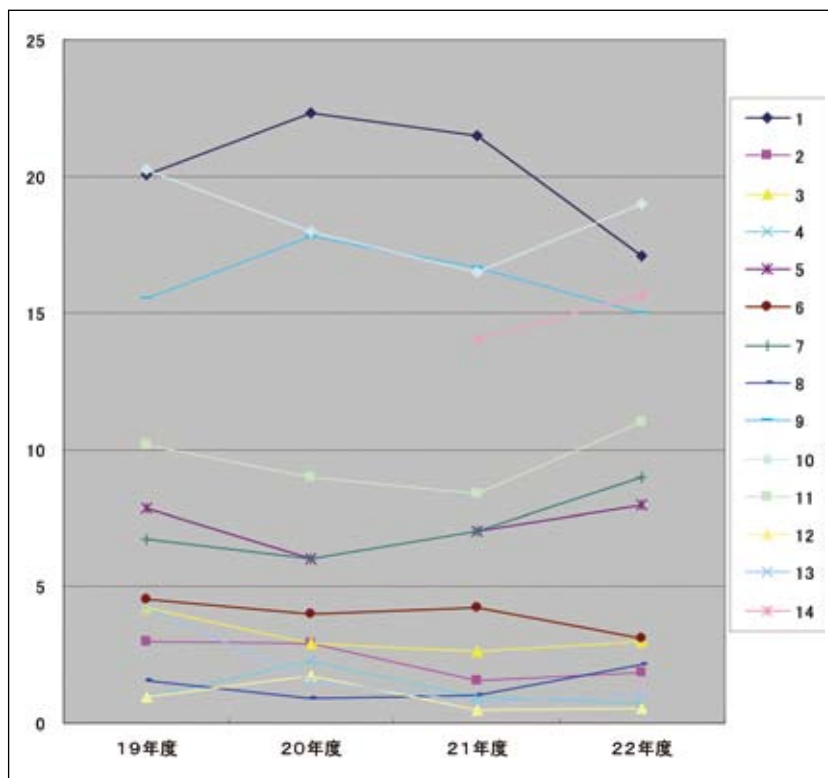


図10 各項目割合の年度別推移

2-3 「学校教員希望の有無」について

図11～14は各年度の「教職（教員）への指向性」を全体と群別に見たものである。

入学段階で「教職（教員）を強く希望」する学生は、19年度より40%、50%、54%、50%と推移し約半数の学生が強く指向している。「強く希望する」に「希望する」を加えると、63%、71%、74%、72%となり、ここ3年間は70%超となった。逆に、「希望しない」、「全く希望しない」は16%、11%、7%、8%と1割を切る状況となった。

全体として教職への指向性が強まっている。そのことは、年々、所謂「非養成系」と呼ばれる学生（3群）の「教職概論」受講者が増加している事実にも見える。

しかし、各群別に見ると指向性は異なる。表5は22年度を例にしたものである。また、「未定」者が1群から順に11%、6%、34%、4%といる。2・4群の学生は比較的早い時期から職業、就業を意識しているのに対し、3群の学生は学生時代に考えるという傾向も伺える。

表5 「各群別の教員希望者の割合の違い」（22年度）

	強く希望する	希望する	希望しない	全く希望しない
1 群	57%	29%	2%	1%
2 群	68%	26%	0%	0%
3 群	32%	16%	11%	7%
4 群	76%	20%	0%	0%

次に、図15～18は「教職（教員）への指向性」の各群別の経年変化を見たものである。

3群を除き「未定」や「希望しない」、「全く希望しない」が減少傾向にある。早い段階で教職や教職以外の選択がなされると、大学での学びがその実現を一義とした学習や取組に矮小化されかねないという指摘がある。就業力育成と学問探究を両立させる取組が求められる。同時に、自らのキャリア形成に向け、早い段階から目的意識を持ち、課題解決に向かう学生が多いということも言える。学生や学生集団の状況やニーズをふまえた授業改善や指導内容の精選が求められている。

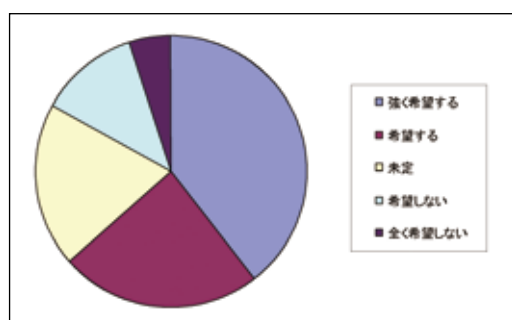
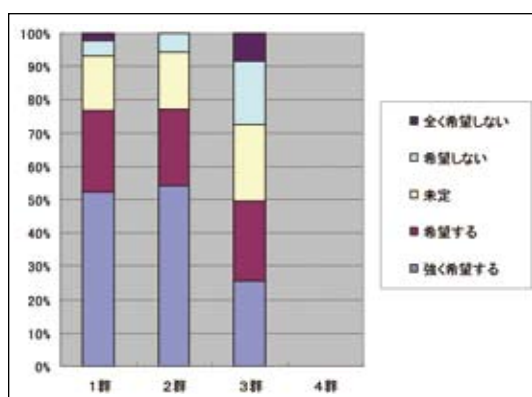


図11 平成19年度 全体と各群別の割合



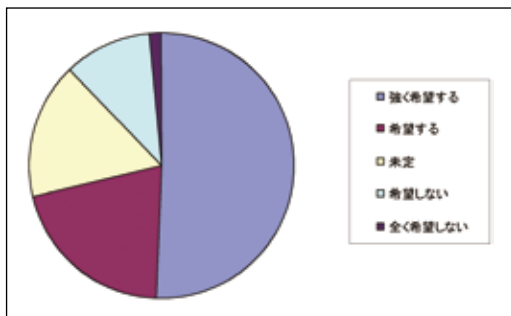


図12 平成20年度 全体と各群別の割合

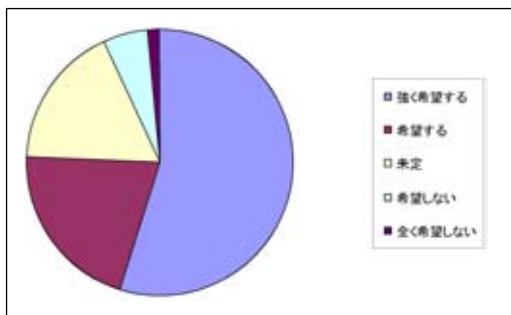
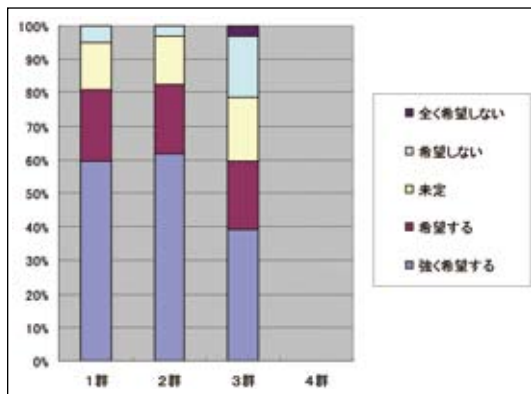


図13 平成21年度 全体と各群別の割合

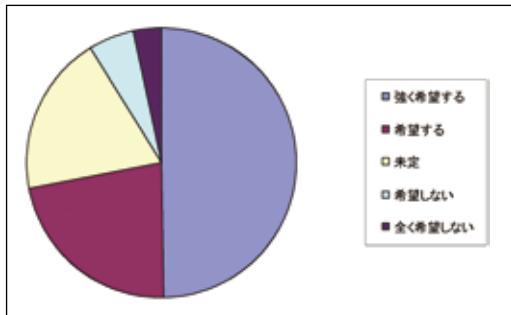
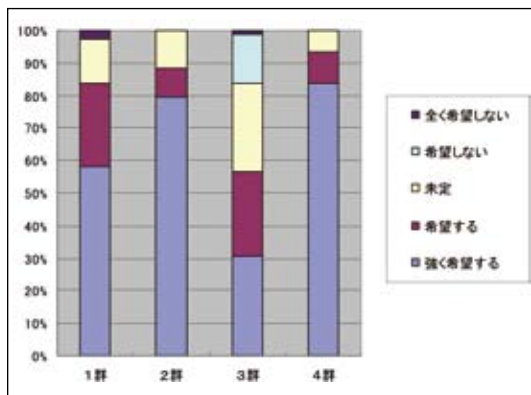


図14 平成22年度 全体と各群別の割合

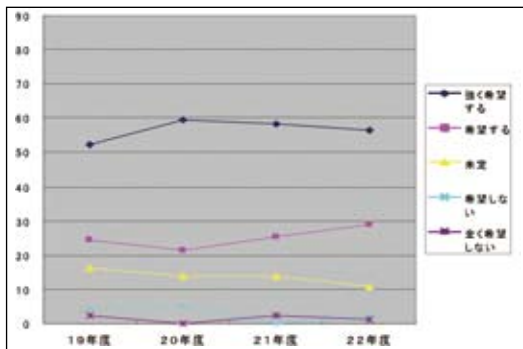
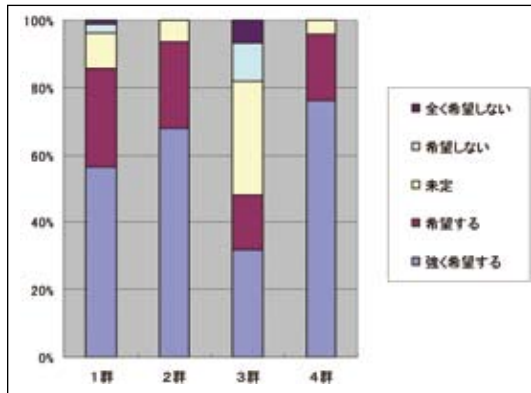


図15 1群の経年変化

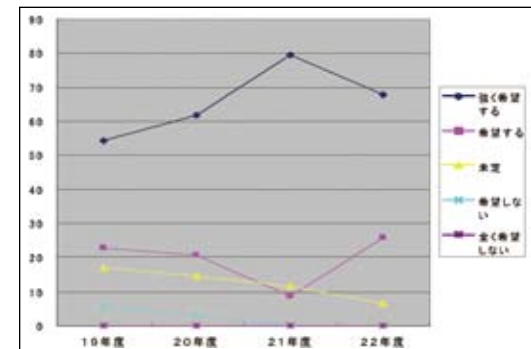


図16 2群の経年変化

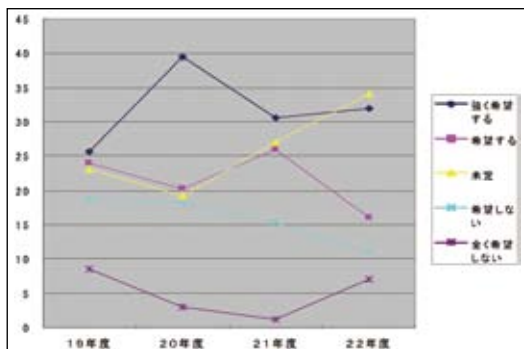


図17 3群の経年変化

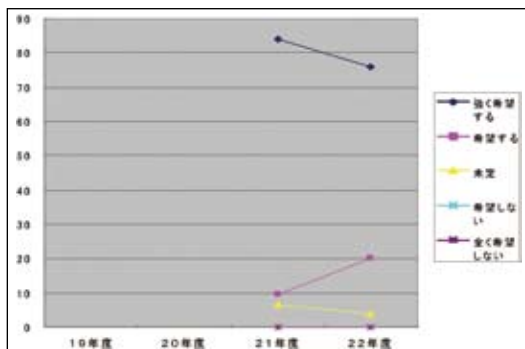


図18 4群の経年変化

2-4 「学校教員の適性への自己評価」について

図19～22は「教職（教員）へ適性の自己評価」を全体と群別に見たものである。

入学初期の段階で「教職（教員）への適性」について「大いにそう思う」、「大体そう思う」学生は、19年度より39%、50%、47%、45%と推移し、半数の学生は自分の教員としての適性を「有り」と判断している。逆に、「あまり思わない」、「全く思わない」は23%、18%、14%、15%と、4人に一人から8人に一人という割合に減じている。

各群別では、2群と4群が比較的「肯定的」に自己を評価をしている。「教職概論」や日常の学生との交流の中で、この群に属する学生には、比較的、入学前から幼児、児童や障害児等に対する教育的ボランティアや交流等の経験を有する者が多く、経験から「子ども」に対する愛着や思いが強いこと、本人の性格や言動にふれた学校教員や周囲から「教員に向いている」と評価された経験を有すること、「子ども」と関わる教員に対する憧れが強いこと等を感じており、比較的肯定的に自己を評価しているものと考えられる。

特に、4群での自己評価の高さが顕著である。4群に限らず多くの学生に指摘できようが、自己肯定は大切ではあるが、教育現場の実際や教員の職務、職責等の僅かな一部を理解している段階での「思い込み」は、教職キャリア形成上の困難にもつながる可能性がある。今後の学習や学内外での諸活動の中で、教育現場や教員の真の姿を見せ、実際の業務や子どもとの関わりを数多く経験させる中で、自らの「求める教員像」や「めざす教育の姿」等を立てさせ、実践的指導力の基礎をつくらせる必要がある。その面で、各年度とも約3分の1が答えている「分からない」が、現時点で「健全」とも言えよう。

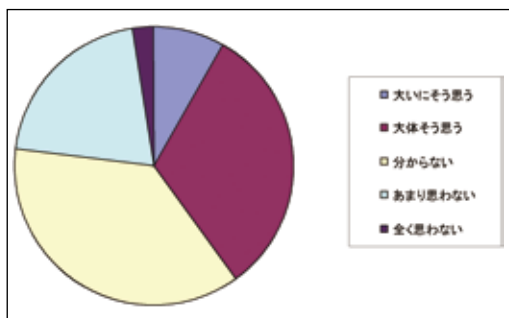
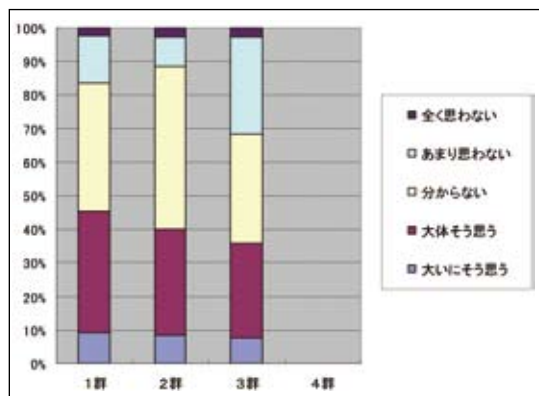


図19 平成19年度 全体と各群別の割合



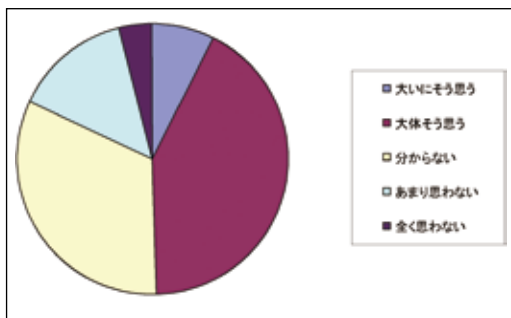


図20 平成20年度 全体と各群別の割合

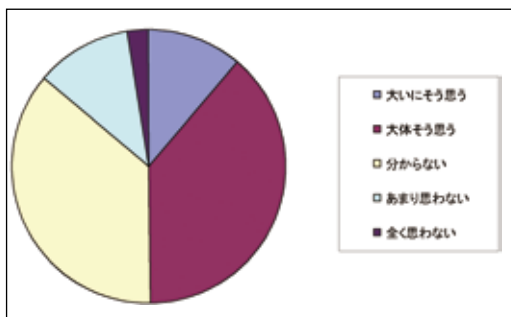
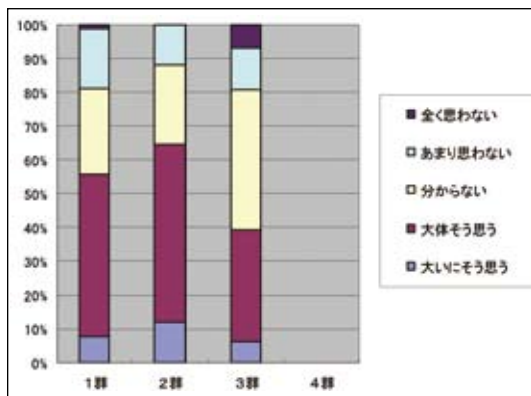


図21 平成21年度 全体と各群別の割合

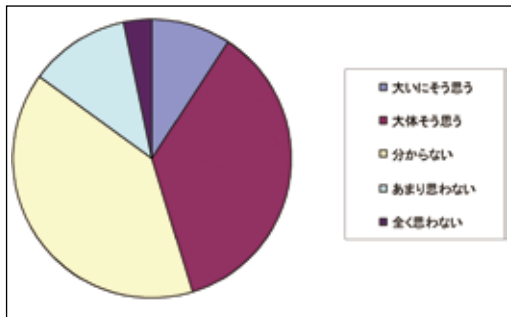
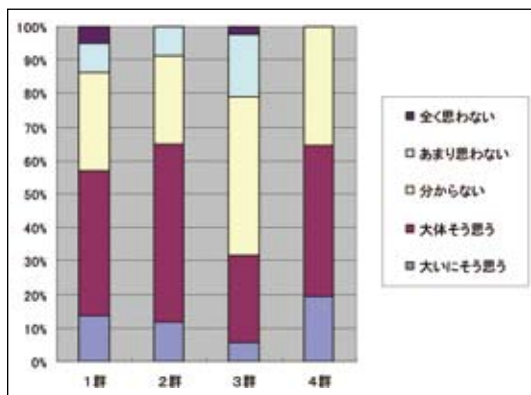


図22 平成22年度 全体と各群別の割合

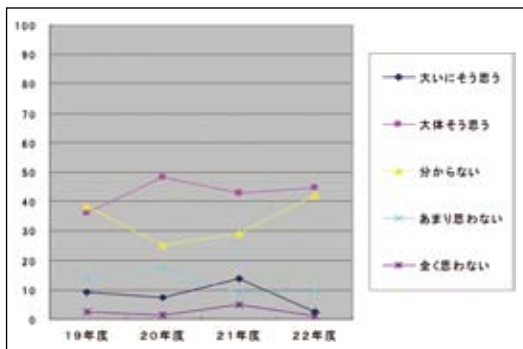
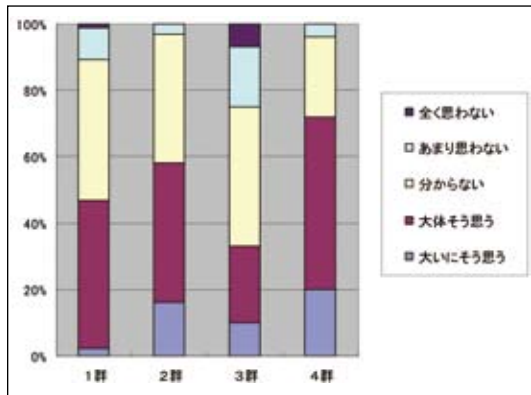


図23 1群の経年変化

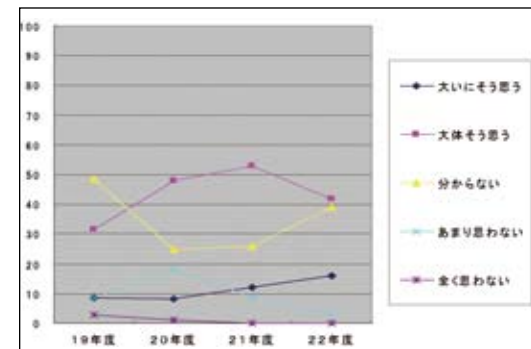


図24 2群の経年変化

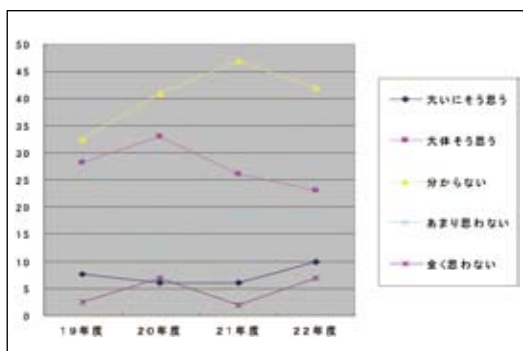


図25 3群の経年変化

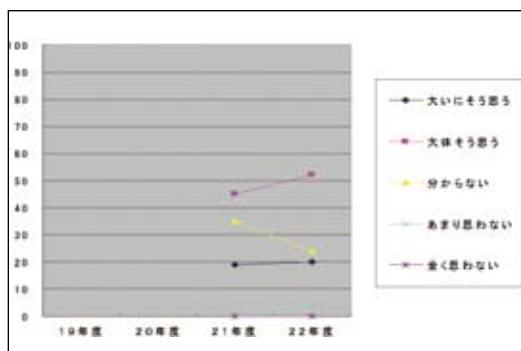


図26 4群の経年変化

2-5 「本学部の受験情報の入手先」について

図27～30で、受験生の「情報入手先」について全体と各群別割合を見た。

「大学・学部ホームページ」から入手する者が最も多く3分の1を占め、「学校の先生」が約20%、「受験雑誌」が約15%、「進路相談室等の資料」、「赤本」が約10%と続いている。

各群間で目立った特徴は断じられず、年度により割合が変化している。高校における進路指導、受験対策の山谷がそのまま反映しているとも思われる。4群を他の群と比較すると「オープンキャンパス・学校説明会」の割合が高い、「先輩・友人」が増加したと言える。4群を構成する「小学校教育コース」は新設コースという目新しさも加わり当初から多数の参加者がある。筆者は「出前講座」で訪れた県内外の高校で、「2年生がキャリア教育の一環でオープンキャンパスに参加し、在学生の姿を見、生きた情報を貰って帰ってきた。」という教員の説明や、「私も参加して志望校を決めました。」という生徒の声にも出会っている。それらの反映であろう。また、22年度には「先輩・友人」の数字が現れたことも2年目の新たな動きと捉えられる。

図31は「情報入手先」について19年度からの変化を示している。「大学・学部ホームページ」、「学校の先生」、「オープンキャンパス・学校説明会」を情報入手先とする者が増加している。「大学・学部ホームページ」からは19年度より32%、33%、34%、35%と推移し、「学校の先生」からは17%、18%、19%、20%、「オープンキャンパス・学校説明会」は少ないながら4%、4%、5%、7%となった。逆に「受験雑誌」、「進路相談室等の資料」、「赤本」は割合としては減少傾向にある。

ネット環境が身近に整備され、家庭や学校等で、「いつでも、誰でも、どこでも」情報が受け取れる時代となった。情報化社会で生まれ育つ生徒や保護者の動向をふまえ、時宜を得た正しい情報を発信することを疎かにしてはならない。また、魅力的で豊かなパフォーマンスやメディアを活用した積極的な広報宣伝が求められる。

「子どもにとって最大の教育環境は教員である。」と言われる。生徒の進路決定やキャリア形成に大きな影響力を有する教員、特に高校教員に対する適切な情報提供が必要である。本学部の教育研究、教員養成や教育貢献等の内容が、高校や進学塾等で全て正しく理解されているとは言い難い。実際の姿を形で見せること、継続的な関わりと積極的な情報発信が必要である。

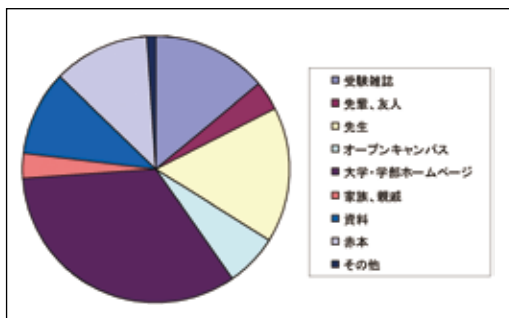


図27 平成19年度 全体と各群別の割合

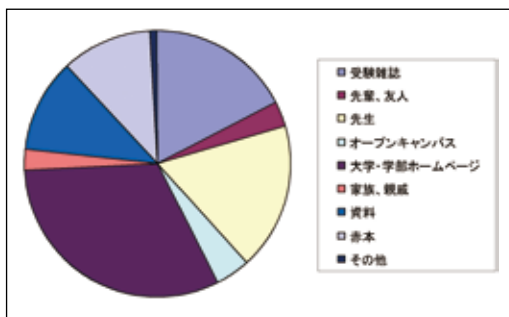
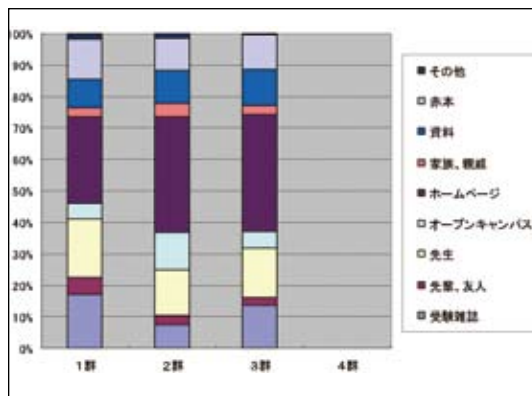


図28 平成20年度 全体と各群別の割合

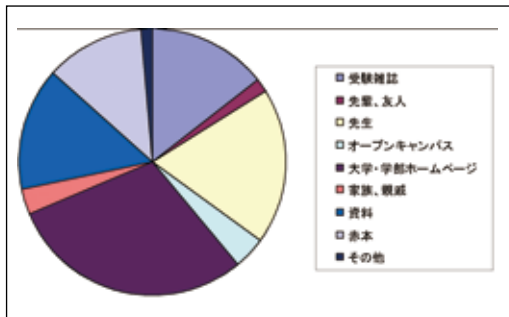
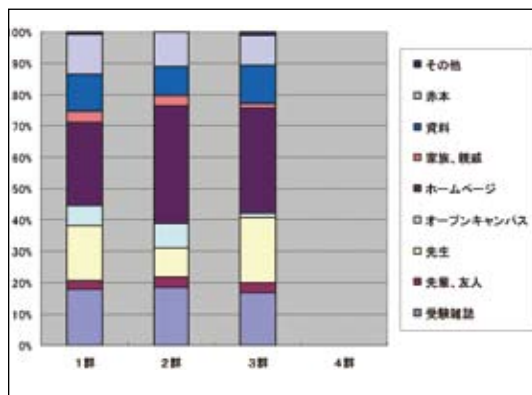


図29 平成21年度 全体と各群別の割合

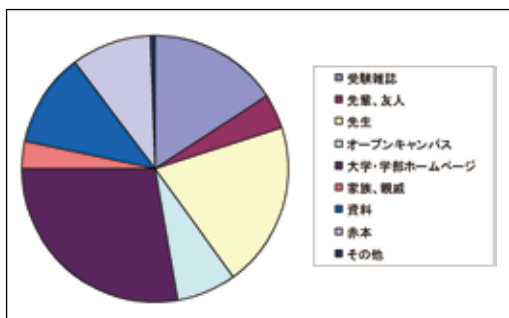
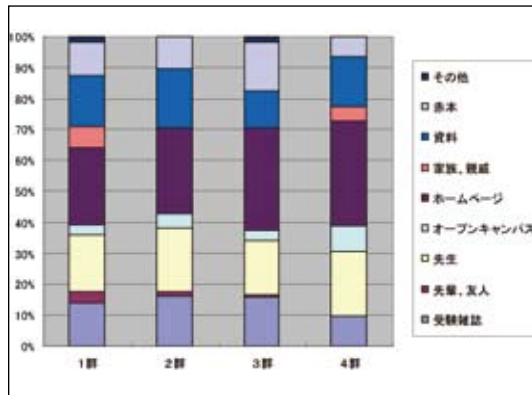
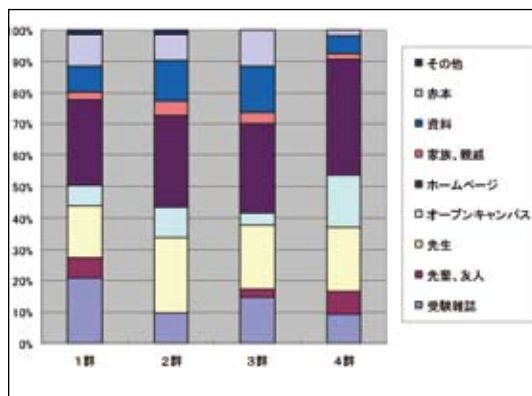


図30 平成22年度 全体と各群別の割合



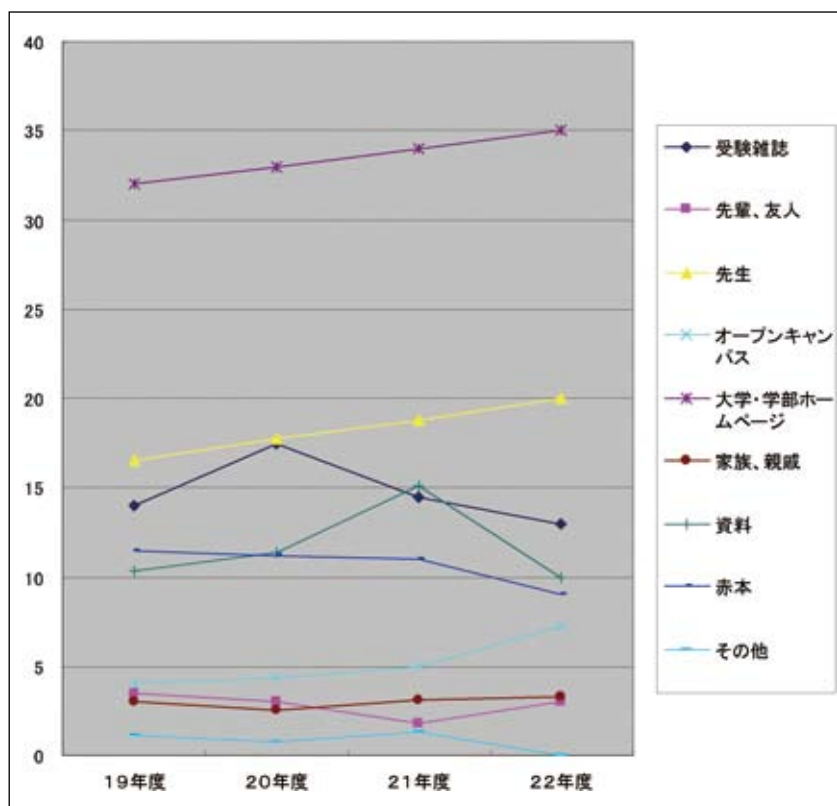


図31 情報入手先の経年変化

おわりに

筆者らは、「教職概論」をとおして、受講者一人一人が、教職の魅力、やりがいや使命感等を理解し、教職への情熱や志向性、今後の学びに対する意欲を育むことや、本学部の教員養成カリキュラムを理解し、様々な学びや活動に積極的に取り組む態度を身につけてほしいと願う。

この稿では、入学当初（「教職概論」受講開始時）の学生や学生集団の、教職やキャリア形成に関する動機、意識、意欲や態度等について、その「違い」、「幅」、「差」の有無を探ってきた。「アンケート結果」という限られた枠内とはいえ、「違い」が見られたことは貴重であった。

今後は、それらの「違い」が、「教職概論」における「学び」の成果や実感にどう影響を与えているのか、「違い」に応じた改善点は何か等について解明したい。

なお、「情報入手先」の結果に関連し、筆者らは本学部の取組を正しく理解して貰う努力を怠るべきではないと考える。積極的な情報発信、メディア活用や開放、開示による正しい認知こそ本学部の教員養成機能に対する信頼感につながると考えるからである。

謝辞

本研究にあたっては、「教職概論」に講師として招聘した公立・附属学校（園）教員や、教育学部の多くの方々のご指導ご支援をいただいた。ここに厚く謝意を伝えるものである。